

“新しい普通科”への学科改編を契機とした 探究学習に関する校内研修の実践的研究

学 籍 番 号 249105
氏 名 大西 弘記
大学院主指導教員 佐々木 靖
大学院副指導教員 田村 知子

1. 背景と目的

1.1 背景

令和4年4月、高等学校設置基準が改正され、普通教育を主とする学科に探究的な学びを充実させた普通科以外の学科（以下、新しい普通科という。）が設置可能となった。

高等学校における探究学習は、学習指導要領（平成30年告示）により導入された総合的な探究の時間を中心に実施されている。しかし、特定非営利活動法人カタリバによる調査結果（2023）では、9割以上の教員が探究学習の推進に関して「課題を感じている」と回答しており、探究学習の実施状況に課題があることが明らかとなっている。

実習校は、新しい普通科への学科改編の対象となったことから、新しいカリキュラムマネジメントサイクルの構築が必要となった。また、学科改編は外生的変革（佐古1992）であり、教職員の反発が予想される中で実践を進める必要があった。

1.2 目的

上記の調査から、探究学習の実施に課題感を持つ高等学校は多いと考えられる。そのため、外生的変革に起因する教職員の反発を前提とした改革を推進する首席の立場から、総合的な探究の時間のカリキュラムマネジメントサイクルの構築の実践を行い、その過程から探究学習の充実に必要な要素や、探究学習を推進可能な学校組織作りに必要な要素を明らかにするアクションリサーチを実施することとした。

この研究で実践事例を示し、各要素を明らかにすることは、探究学習の推進に取り組もうとする高等学校にとって有用であると考えた。

2. 実践研究

2.1 基本学校実習での取り組み

研究1年目は、総合的な探究の時間のカリキュラムマネジメントに対するリフレクション、新しいビジョンの作成、カリキュラムマネジメントモデル分析の順に実践研究を行った。

リフレクションではビジョンの不在と、早急な共有・浸透の必要性が明らかとなった。そのため、共有が容易な要素として、既存の学校文化を基盤としたビジョンの作成を行い、ビジョ

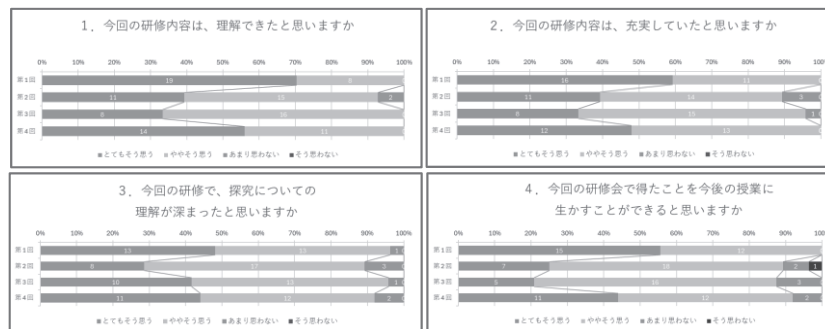
ンの共有に成功した。

次に、カリキュラムマネジメントモデル分析（田村2020）を実施した。その結果、以下の通り、「カリキュラムマネジメントサイクルの構築に向けた4つの課題」として、①カリキュラムマネジメントサイクルが修正・改善のサイクルとして機能するための組織構造の構築、②探究の授業及びカリキュラムマネジメントを実践可能な教員の育成、③学校教育目標（Vision）の具体化・共有・浸透、④学科改編を自分ごととして捉え、前向きに取り組む教職員集団の形成、との課題を特定した。

2.2 発展課題実習での取り組み

2年目の研究では、特定した課題のうち、学校文化に関する課題の解決のため、全4回の校内研修を実施した。

研修は学科改編の中心となっている教員を対象としたインタビューの実施と、毎回の研修後のアンケートの分析等により研修のテーマ設定と効果測定を行った。また、研修は外生的改革との背景から、教職員の配慮を十分に行って実施した。全4回のアンケートの結果を以下に示す。



全4回の研修後のインタビュー分析とアンケートの結果から、「学科改編に対する教職員の心理的な抵抗感の低減」と「職員の探究学習に対する関心の高まりと前向きな関与への意識の醸成」との成果が得られたことが明らかとなった。

3. 総合考察

本研究で取り組んだ各実践は、教職員の心情面での配慮に基づき実施された。この配慮は、外生的変革に起因する教職員の心理的抵抗感を軽減させた。また、教職員の合意形成が進んだことが、カリキュラムマネジメントを次の段階に進めるための要素となった。このことから、本実践研究は、カリキュラムマネジメントを教職員の反発が前提となる環境下で進める際、「教職員の心情面への配慮」を行うことが有効であるとの事例を示したと考える。

また、実習校には校内研修を実施する学校文化が存在しなかった。そのため、年4回の継続的な校内研修を実施したことは、実習校に研修文化を作る実践でもあった。

本実践研究は、令和8年度入学生に向けた実践のため、実際のカリキュラムマネジメントサイクル運用の実証に至っていない。しかし、校内研修の実施により、教職員の意識変容がみられ、カリキュラムマネジメントが進展したこと。そして、校内研修の有効性が教職員に認識され、校内研修の実施が学校文化となる契機をつくることができたことが成果である。